
GOSICKs **ゴシックエス 春来る死神**

雀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

GOSICKS ゴシックエス 春来る死神

【Nコード】

N6709X

【作者名】

雀

【あらすじ】

ここはソヴニール王国。留学生としてきた『久城一弥』、脅威の頭脳を持つ少女『ヴィクトリカ』、同じく脅威の頭脳を持ち大人びた雰囲気を漂わせる『シーナ』。彼らが出会い、あらゆる事件に巻き込まれてゆく

プロローグ

桜の舞う季節。

ピンク色に染まった通学路。

軽い足取りで進む少女。

その先にそびえ立つ聖マルグリット学園。

「ここか……」

小さく呟いたその声は、春の陽気に吸い込まれていった。

ここから、人々に避けずまれ続けてきた一人の少女の第二の人生が始まるうとしていた。

“死神”

“死をもたらす悪魔”

何を言われても気にすることはない。

仕方のないことだから。

しかし少女は、同じ境遇のもう一人の少女とであった。

他人から距離を置いた二人はいつの日かこう呼ばれていた。

“金色の妖精”と“漆黒の死神”

1 (前書き)

今回は殆ど原作通りです。

ただし弄ったり省略したりしてますけど。

それでは、最初の事件、ご堪能ください。

久城一弥は真面目な少年である。

それだけが取り得、といっても差し支えがないくらい、真面目で堅物で、無口で無趣味で、無味無臭な男である。

父は軍人で、ことあるごとに一弥にこう言う。『帝国軍人の三男として……』と。一弥は自分でも、いつも、へまをしないように気をつけていた。帝国軍人の三男として真面目に行動しなくては、と

……

「……久城くん！ 久城くん！」

その日。朝の七時ちよつと過ぎのこと。

いつもの一弥なら、男子寮の自分の部屋で目を覚まし、顔を洗って髪を撫でつけて制服に着替えて、カッカカッ……と足音も堅物らしく響かせ、一階の食堂に降りることになっている。

いつもなら誰も起きてはおらず、二十歳過ぎぐらいだと思われる、赤毛の色っぽい寮母さんが一人、丸椅子に腰掛けて足を組み、くわえ煙草で朝刊を読んでいるのが関の山である。

しかし、その日の朝は……。

起きて、顔を洗う途中だった一弥は、扉をガンガン叩く音と、女の人の声に驚いて、制服を着かけた姿のまま扉を開けた。

燃えるような赤毛に、グラマラスな体つきをした、色っぽい寮母さんが眠たそうな顔で立っていた。

「……おはようございます。な、なにか？」

「よかった。久城くんなら起きてると思って。チーズとハム買ってきてー！」

「……へ？」

寮母さんは有無を言わず一弥を部屋から引きずり出すと、制服

のポケットになにやらサンドイッチらしき物をぐいぐい突っ込んだ。
一弥は目を白黒させて、

「ななな、なんですか？ チーズとハム？ 僕が？ どこに？……
どうして？」

「正しくはリコッタチーズを五百グラムと、ハムを一キロ。久城くんが。村の朝市に。私が昨日、買い物するの忘れたから」

寮母さんは一気にまくし立てた。

「ど、どうして僕が……」

「早起きだから。あと、気が弱……あわわわ、や、優しい、そう、
優しいから！」

階段を引きずり降ろされ、一弥は容赦なく寮の外に蹴り出された。
寮母さんはふくよかな、いかにも女性らしい体のラインを揺らして、
「久城くんの朝御飯は、そのサンドイッチね。私はパンを切ったり
お湯を沸かしたりしてるから、早く買ってきて！」

「あのっ……！」

ばたん、とドアが閉まった。

一弥は呆然と、寝ぼけた顔でドアを見上げていたが、やがてため
息をつき、

「……わかりました」

仕方なく正門に向かって歩き出した。

一弥は見た目によらずロマンチストだ。

(たとえば、朝。そう、こんな朝に……)

一弥は想像し始めた。

(僕が歩いていると、急いでやってきたかわいい女の子と正面衝突
するとか。「だいじょうぶですか？」と聞くと、彼女ははずかしそ
うに「だいじょうぶ、ありがとう」と答える。目が合ったとたん、女
の子は僕に恋をして……)

そこまで考えて、一弥はふと我に返り、らしくなくちよっとベタ

な想像を巡らせていた自分のことを、肩をすくめて笑った。

(……なーんて、現実にはあり得ないよ。それより、チーズとハムだ。急いで買って、学園に戻らなくちゃ。留学して半年、遅刻なんて一度もしていないんだ。帝国軍人の三男は遅刻なんてしないんだ。だから急いで……)

目の端を何かが横切っていった。通行人だろう。こんな朝早くに、寂れた村道を人が通るなんて珍しいが……。

(でも……その“僕の女の子”は……)

一弥は急ぎながらも、なぜかまた想像の世界に戻っていった。

(できたら金髪がいいな。だって金色はともきれいな色だもの。)

僕の国にはない、眩しい髪の色……)

そのとき……

きゅるるる……！ ブレーキ音のような。

妙な音がした。一弥はちょうど、金髪について真剣にあれこれ考えながら、つまり前も見ずに迂闊に角を曲がったところだった。続いて、大きな何かがぶつかったような音がして、その後、しんと静まり返った。一弥は我に返って、

「……えっ？」

葡萄園を仕切る低い石堀に、ドイツ製のぴかぴかのオートバイがめりこんでいた。角を曲がれずにすごいスピードでぶつかってしまつたらしい。少しタイミングがずれていたら轢かれるところだったことに気づき、一弥の顔が陰しくなった。

黒いヘルメットをかぶった大柄な男がオートバイにまたがったまま、事故に驚いたのか硬直していた。一弥は抗議しようとして口を開いたが、あまりにも男が身動きしないので心配になり、

「あの……。だいじょうぶですか？」

返事が返ってこなかった。覗き込むと、ヘルメットの中で男の顔は、目を見開いて瞬きもせず、硬直していた。

一弥が内心、

(かわいい女の子と鉢合わせしたいなあなんて考えてたのに、オー

トバイにまたがった大男と鉢合わせか。つまんないなあ。これ以上悪いことなんて、ないよ)

そう思ってまたため息をついたとき……。

それ以上悪いことが起こった。

何かが地面に向かって落ち、転がった。

その男の、首だった。

一弥はぎゃあつと悲鳴を上げた。
男の首はヘルメットごとごろごろと転がって、一弥の足元でぴたつと止まった。そして硬直した表情のまま一弥を見上げていた。

「だいじょうぶですかー!?!」

その瞬間……。

噴水の水が流れるような妙な音が響いた。一弥が顔を上げると、取れた首の根元から鮮血が噴きだして、首なし死体とオートバイを真っ赤に染め上げた。

一弥はまた悲鳴を上げた。

血飛沫の向こうにはきらきらと輝く朝日と、生い茂る葡萄園の緑があった。さわやかな朝だった。

(女の子じゃなくて、首なし死体と鉢合わせ、か……)

一弥は眉をひそめ、いかにも生真面目そうなしかめ面になって、考えた。

(……留学なんて、しなきゃよかった)

一度、大きなため息をついた。そして……。

気絶した。

次に気づいたとき、一弥は見覚えのない部屋のベッドに寝かされていた。小さくて薄暗くて、薬品棚に囲まれている。一弥は起き上がりながら、窓の外を見た。学園の敷地内の景色が広がっているのに気がついて、恐らくここは保健室だろうと見当をつけた。

その時廊下の向こうから、かわいらしいソプラノの音が張り上げられてきた。

「待つてください、警部さん！ そんなの横暴だわ！」

聞き覚えのある声に、一弥は顔を上げた。ほどなく声の主がぱたぱたと足音を立てて近づいてきて、保健室の扉を開けた。

ぴよこり、と小さな頭が現れる。

大きな丸眼鏡に、垂れ目がちのブラウンの瞳。肩までのブルネットヘア。一弥の担任のセシル先生だ。恐らく二十代前半のはずだが、見た目は生徒たちよりも幼い。どこかぷくぷくとした仔犬を思わせる女性だ。

先生は一弥が目を覚ましていることに気づくと笑顔になり、保健室に入ってきた。

「久城くん、気がついたの？ ^{サブ}だいじょうぶ？」

「あ、はい……」

「めずらしく遅刻だったから、心配してたの。寮のほうに連絡したら、寮母さんがもごもごとなにやら言いよんどんで……」

一弥は、チーズとハムのことを思い出した。おかずなしの朝御飯を出してしまったって、寮母さんは怒られたらどうか……と生真面目に思い悩んだが、その後、あの首なし死体のことを思い出して顔色を青くした。

「そしたら、村道で妙な死体が発見されて、そのそばで倒れてたって連絡があったの。それで村の人にここまで運んできてもらったのよ。久城くん……いつたいながあったの？」

心配そうに曇る先生の表情に気づいて、一弥はあわてた。説明しようとして口を開いたとき、ガラガラガラッ……と大きな音がして、保健室の扉が開いた。

一弥は扉の方を振り返った。
そして、硬直した。

そこにはおかしな男が立っていた。若い男だ。背がスラリと高く、顔も貴族的に整った二枚目で、服装も仕立てのいいスーツに銀のカーフスをはかせた伊達男だった。だが……。

一か所だけ、ぜったいにおかしいところがあった。
頭だ。

男はきらきらと輝く金髪を、なぜか、前方に向かってドリルの先のように尖らせ、ぐりゅんと流線型に固めていた。一弥はぽかんと口を開けてその金色のドリルを見上げていた。男は壁に片手をつけて片足を後方にぴんと伸ばした、バレエダンサーのようなナイスポーズを決めると、一弥を見た。

そして口を開いた。

「待たせたね」

「……………えっ？」

待ってたっけ？ 誰？ などと一弥が悩んでいると、となりでセシル先生が息を呑み、きつと男を睨みつけた。男は構わず、

「私がグレイヴィール・ド・ブロワ警部だ」

「はあ……………」

「今から君に事情聴取する」

「あ、わかりました」

なんだ、警察の人が、と一弥がうなずいたとき、ブロワ警部がぱちんと指を鳴らした。すると廊下をばたばた走ってくる音がして、兎革のハンチングをかぶった若い男が二人、やってきた。こちらは警部とちがって、労働者階級らしい気さくな顔立ちで、服装も木綿

のチョッキに丈夫なブーツと、村でよく見かけるものだった。彼らはプロワ警部の部下らしかった。

しかし、一弥は二人に引つ張られて保健室を出ようとして……妙なことに気がついた。

二人の若い部下は、なぜかぎゅっと強く強く手を握っていた。

一弥は一度、目をそらした。

それからもう一度、見た。

……やっぱり手をつないでいた。

不気味そうに二人を見つめる一弥に、なぜか二人はいいわけのよ
うに、

「幼なじみでねー」

「はははー」

そろって、白い歯を見せて笑った。一弥はわけがわからなくなっ
て頭を抱えた……。

プロワ警部と妙な部下二人によって、一弥が連れて行かれたのは、
資料室として使われている校舎の一室だった。

そこは薄暗く、気味の悪い部屋だった。薄茶色の地球儀と、イン
ド土産らしいよく分からない巨大な木彫りと、中世からあって、捨
てていいのかよく分からないからここに積んであるらしきへんな武
器の山。

ランプは燃えが悪く、絶えずブスブスツ……といやな音を立てて
いた。

プロワ警部は一弥をやけにきしむ古い木の椅子に座らせると、自
分は頑丈そうな四角い机に尻を乗せ、浅く座った。地球儀を手にと
ってくるくると遊びながら、

「久城一弥。歳は十五歳。一九〇九年生まれ。成績はトップクラス。
友達はいない」

とつぜん、一弥のデータをしゃべり始めた。最後の“友達はいな

い”のところ、一弥はしゅんとしてうつむいた。

生まれた国にいた頃は、通っていた士官学校に話の合う友人がいたし、近所にも幼なじみの少年たちがいた。でもソヴェールに来てからは、一弥はどうにも貴族の子弟になじめず、東洋人を遠巻きにする空気に苦しんでいた。

そんなことを思い悩む一弥には構わず、プロワ警部はとつぜん「ふははは！」と笑い始めた。

「困ったものだよ。少年犯罪というものには頭を抱える。未来ある若者を絞首台に送るのは気がすまんが、罪は罪だよ、君」

「……はあ？」

一弥は我に返った。すごくいやな予感がしてきた。ちらりとドアのほうを見ると、逃がすものかというように、手をつないだ部下二人が足を踏ん張って立っている。

これは、もしかや……？

警部は科白とは裏腹の、じつに晴れやかな笑顔で一弥を見つめていた。そしてなぜか片足を上げ、不安定なニスポーズで体をぐらぐら揺らしながらも、一弥をびしっと指差した。

「久城くん、犯人は君だな！」

一弥は頭を抱えた。必死で反論する。

「ちがいます！ 僕は通りかかっただけです。そんな強引な。抗議する。僕は断固、抗議します。そして入念な調査とそれによる正確な推理をあなたに要求します。ほ、僕は……」

「ちっ、ちっ、ちっ」

「……………」

プロワ警部はウインクしながら人差し指を振っていた。なんだか神経に障る態度だった。一弥がいらいらしながらその指を見ていると、警部は恐ろしいことを言った。

「私は君の心理などに興味はないのだよ、久城くん。留学先で殺人を犯し、外交問題にまで発展させるような心理には、ね」

「が、外交問題……？」

「殺されたのは、休暇中の政府職員なのだよ」

「ま、まさか……」

一弥は頭を抱えた。顔が真っ青になった。

生まれた国の風景や、やさしい母の顔、厳格な父の顔、ソヴェールに向かう船の甲板から目をこらした、港町の鮮やかな朝日……。

すべてが走馬灯のように脳裏をよぎっていった。

「……久城くん、犯人は君以外に考えられないのだよ」

「そ、そんな！ どうして……そんなことが、言えるんですか……？」

「ふはははは！ それはだね……」

ブロワ警部がまた新たななるナイスポーズをつくろうと片足を上げたとき……。

誰かが部屋の扉をノックした。

「こんにちは、こんにちは……！」

警部も部下二人も知らんぷりしている。

と、また……。

「こんにちは、こんにちは……！」

それでも知らんぷりしていると、強引に扉が開いた。つないだ手で通せんぼしている部下二人の向こうに、セシル先生のかわいらしい小さな顔が見えた。先生は笑顔で、部下二人のつないだ手の下をくぐり抜けると、泣きそうになっている一弥の前に歩いてきて、

「はい、これ」

紙を三枚、差し出した。

思わず一弥は受け取った。それは授業で使われるプリントだった。今日の午前中の授業分だ。一枚には久城一弥の名前が書かれていた。二枚目と三枚目には……。

それぞれ別々の少年の名前が書かれていた。

“ヴィクトリカ”と“シーナ”と。

セシル先生は有無を言わせぬ感じの笑顔で、一弥を見ていた。一弥が問うようにみつめかえすと、

「あのね、午前中の授業のプリント。一枚は久城くんよ。あと二枚は、同じく休んでいたべつの生徒のよ」

「はあ……」

一弥は、この二つの名前に聞き覚えがあることに気づいた。教室の窓際に、いつも必ず空席が二つあるのだ。ぼっかり開いた席。留学してから半年のあいだ、一度も、その席の生徒が登校した姿を見ることはなかった。

名前は知っていた。ヴィクトリカ、そして、シーナ、だ。

どうしていつも必ずいないのだろう、と気にはなっていたが……。

セシル先生は笑顔のまま、

「久城くん、はやく教室に戻りなさい。でも、戻る前にこのプリントを届けてほしいの。お願いしていい？」

「はあ……」

一弥がうなずくと、プロフ警部が怒り出した。

「こら、君！ 捜査の邪魔をするな！」

「お言葉ですが警部さん」

セシル先生は一步も引かない構えで、振り返った。警部は気迫に押されたように、口を閉じる。

「犯人扱いするおつもりなら、ちゃんと逮捕状を取ってからにしてくださいな。これでは警察権力をかさにきた横暴ですわ。学園を代表して、私、抗議いたします！」

けいぶはつつと目を細めた。

それからゆつくりとうなずいた。自身ありげに、

「ふむ。この状況なら、今日、申請すれば明日には逮捕状が取れることでしょう。明日、またお邪魔しますよ。大切な生徒を守りたい気持ちは分かりますが、勇敢さのために命を落とした者も歴史の陰に多いことをお忘れなく。勇ましい先生……！」

一弥はセシル先生にぐいぐい引っ張られて、その不気味な部屋か

ら廊下に転がり出た。

「先生、あの、ありがとうございま……」

「いいのよ。それより、これ」

セシル先生は一弥にプリントを押し付けた。廊下を歩きながら、

「図書館ね」

「と、図書館……ですか？」

「そう」

セシル先生はうなずいた。

どうやらサボリ魔で劣等性の二人は、なぜか図書館にいるということらしくった。だが、どうして教室にこずにそんな場所にいるのだろうか？

一弥の脳裏に、教室の窓際の空席と、なぜかその席を恐れるように遠巻きにしているクラスメートたちの姿が蘇った。

どういことだろう？ なにせ、一度も顔を見たことがないというのは尋常ではない。

セシル先生は楽しそうに笑って、言った。

「図書館塔の一番上よ。あの子、高いところが好きだから」

「そう、ですか……」

一弥はうつむいた。

……このとき一弥は、なぜか少し傷ついた気がしたのだった。一生懸命に授業に出て、予習も復習もして、この国の公用語であるフランス語や、文献を読み解くためのラテン語なども必死で勉強している優等生の自分を褒めずに、サボリ魔の劣等性のことを笑顔で話すなんて、ちょっとだけ先生に裏切られたような気がした。

ついさっきおかしな警部に恐怖のどん底に突き落とされた反動もあってか、一弥はめずらしく、不機嫌そうに返事をした。

「なんとかと煙は高いところが好きって、僕の国のことわざにありませんよ」

「もうっ、久城くんたら。そんなことはないわ」

セシル先生は挑発に乗る様子もなく、代わりに、実におかしそう

にくすくす笑った。

それから、なぜか夢見るように言った。

「あの子達はね、天才なのよ……！」

果たして、東洋の島国からやってきた成績優秀な秀才少年をさしおいて、担任から天才呼ばわりされるサボリ魔とは、何者であるのか……？

一弥はそんなことを考えながら学園の砂利道を歩いていた。ふくれっ面のままだが、元来の生真面目な性格で、頼まれたプリントをちゃんと届けようと図書館に向かっていた。学園の敷地はフランス風庭園を模した豪華な造りで、あちこちに噴水や花壇や小川が造られ、その合間には心地いい芝生が広がっている。一弥はその芝生の合間の白い砂利道を歩いていた。

校舎裏にのっそり建つ建物にたどり着く。

聖マルグリット大図書館。

角筒形の図書館の壁一面が巨大書棚になっている。中央は吹き抜けのホールで、遙か上の天井には荘厳な宗教画が描かれている。書棚と書棚を、まるで巨大な迷路のように細い木階段が危なっかしくつないでいる。

十七世紀初頭、学園の創立者である国王が、いちばん上の秘密部屋で愛人と逢引に耽るため、わざと迷路状に建設したのだという伝説のある大図書館。

だがいまは静寂に包まれ、埃とカビと、知性の匂いが濃密に漂っている。

一弥は敬虔な気持ちで上を見上げた。と……

天井辺りから、黒い影のようなものが見え隠れしているのに気づいた。

(……なんだろう?)

首をかしげ、迷路階段を上がり始める。

……壁から壁へ。カクカクと、少しずつ天井に近づいていく。まるで綱渡りだ。下を見ないように、震えながら細い階段を上がる。

……だんだん疲れてきた。こんなところでさぼっている劣等性のために、なんで僕が……と腹立ちながら上がっていくうち、いつの間にか、先ほど影が見えた辺りまで来ていた。

ほんのり甘い香りが鼻をつく。

一弥はおそろおそろ足を進めた。

そこに 植物園があつた。

図書館のいちばん上は、なぜか茂る温室だった。天窓からは柔らかな光が射し込み、風に緑が揺れている。国王の逢引の伝説とは裏腹に、明るい無人の部屋だった。

温室から階段への踊り場の手すりのところにもたれかかるようにして、漆黒の少年が立っていた。

柔らかな光も吸い込むような漆黒の髪、マルグリット学園の制服とは少し異なつた学生服を纏っていた。

顔は、大人びているが、どこか幼さを捨てきれない表情をしていた。とても顔立ちが整っていて、ぱつと見ただけでは精巧な人形とまちがえてしまうような、美形だった。

と、ふいに少年が口を開いた。

「遅刻しただけでは飽きたらず、その上図書館でさぼるつもりか？ もちろんそれは構わぬが、せめて私の邪魔にならぬよう、向こうへ行つてもらえると助かる」

少年はゆつくりと口を閉じた。

高めのテノールの声に、一弥は息を呑んだ。見た目とはずれた、どちらかと言うと、少年よりも少女に近い声。

呆然と自分を見つめている一弥には構わず、その、不思議な雰囲気をかもし出す少年は、静かに本を読んでいた。

一弥はようやく気を取り直して、

「えっ……もしかして、君がヴィクトリカなのかい？ それともシーナ？」

返事はなかった。一弥はおそろおそろ続けた。

「君がそのどつちかなら、その、君にプリントを持ってきたんだけどね……」

少年が黙って手を差し出した。

一弥は数歩、近づいて、プリントを差しだした。静謐なその場所に、意外なほど大きく自分の足音が響き、一弥は思わずたじろいだ。自分が静かなるこの楽園の無粋な闖入者のように思え、知らず顔を赤らめる。

それから一弥は、そつと彼を観察した。

(……この劣等性、ヴィクトリカとシーナ、どつちなんだろう。聞いても答えてくれなさそうだし……。それにしても綺麗な人だな。思わず見とれちゃったよ)

と、片手を伸ばして二人分のプリントを受け取り、また読書に勤しんでいた少年が、ふいに……。

口を開いた。

「ところで、君は一体誰かね？」

「えっ」

一弥はたじろいだ。なぜか少し赤くなって、

「僕は……久城だ。君と同じクラスのね。一度も会ったことないけど」

「東洋人か」

少年はなぜかニヤリと笑った。

そして、少女のような声で楽しそうに呟いた。

「なるほど。では君が 春來たる死神 なのだな」

「……は？」

一弥は聞き返した。聞き覚えのない妙な言葉だった。少年はにやにやして、

「君、知らなかったのか？このカビくさい迷信だらけの学園にまつわる、くだらない怪談の一つだ。春やってくる旅人が学園に死をもたらす。ここの生徒たちはなぜか怪談が大好きでね。君は格好

の怪談の材料なのだ。だが、内心恐れているために誰も君に近づこうとしない。……かつての我のようにね」

「な、なっ……？」

一弥は言葉をなくしてそこに立ち尽くした。

……心にぽっかり穴が開いたような気がした。

脳裏に、一人きりで教室にいる自分、遠巻きにしてこそそこそ何か話している貴族の子弟たち、話しかけたら逃げるように去っていった近くの席の少年　さまざま情景が思い出された。

留学してから半年、どうして誰とも親密になれないんだろうと悩んでいたら、まさかそんな迷信のせいだったとは……。

一弥はムキになり、

「だ、だけど、君、それはおかしいよ。僕が留学してきたのは半年前なんだからね。季節は秋だ。ほら、おかしいだろう？」

少年の横顔がせせら笑った。

「ほう、そうか？」

「そうだよ」

「まあ、どちらにせよ生徒たちには関係ないのだろうよ、君。黒髪の無口な東洋人は、死神のイメージにぴったりだからなあ」

「む。それを言ったら君だって、黒髪だし、無口そうじゃないか」
もう話は聞いていないのか、その言葉に返事は返されなかった。

一弥はしばらくその横顔を睨みつけていた。冷酷で、取り澄まして、拒絶の浮かぶ顔だった。ソヴェールにきてからいやというほど見続けた横顔。貴族特有のお高くとまった態度だ。

一弥は急に、彼に対して緊張と反発を感じた。自分が苦勞している貴族社会に対する気持ちだが、むくむくと胸にわき上がってきたのだ。

一弥はきびすを返し、迷路階段を降りようとした。

数歩、進んで……ふと気づいた。

くるつくと振り返り、小声で少年に聞く。

「あのさ、君……ええと、ヴィクトリカ？」

「ちがう」

「じゃあ、シーナ」

「……なんだ？」

「君、どうして僕が遅刻したことを知ってたんだい？」

少年はせせら笑った。

「ふっ。君、そんなことはかんたんだ。我の中にある“知識のパスル”を使えばな」

「どういうことだよ……？」

「それはだな」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6709x/>

GOSICKs ゴシックエス 春来る死神

2011年10月28日04時23分発行